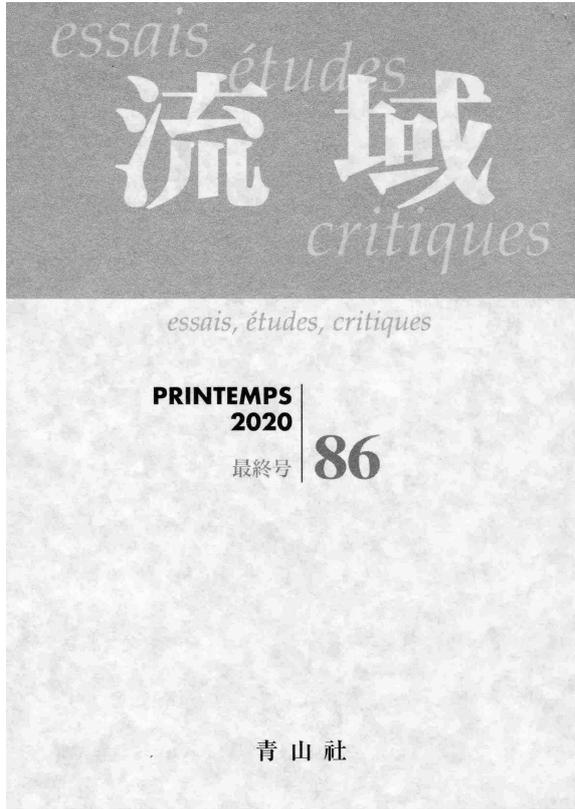


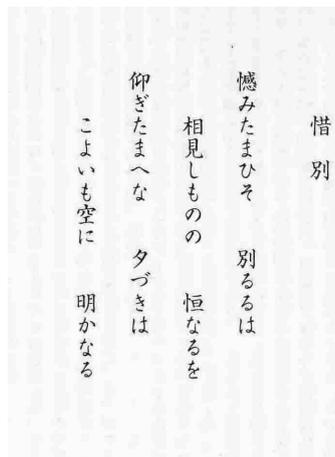
『流域』 最終号

原野 昇



フランス文学、フランス文化とその周辺の原稿で毎号埋めつくされているユニークな雑誌『流域』（京都、青山社刊）の最終号（86号）が刊行された（2020年5月25日）。同誌は、編集者・保野岳人氏が、1980（昭和55）年の創刊以来40年にわたり、原稿集めから出版まで一人で発行され続けてこられたものである。保野氏が本（2020）年4月、86号の編集の最中、校了間際に、不慮の病に倒れられ、帰らぬ人となられたため、同誌が思いがけずも本号をもって廃刊となるのは悔やみても余りある。保野氏なくして『流域』なく、『流域』なくして保野氏なく、であってみれば、やむを得ないということか。

「これは保野さんの分身のようなものとお見受けしますので、このような世俗に背を向けた高雅な雑誌がなくなるのは惜しんでも余りあるものの、誰がこれを引き継いでも、それは「流域」ではなくなるように思われます」（中務哲郎、同誌、p.2）



「惜別」 水野 淑子

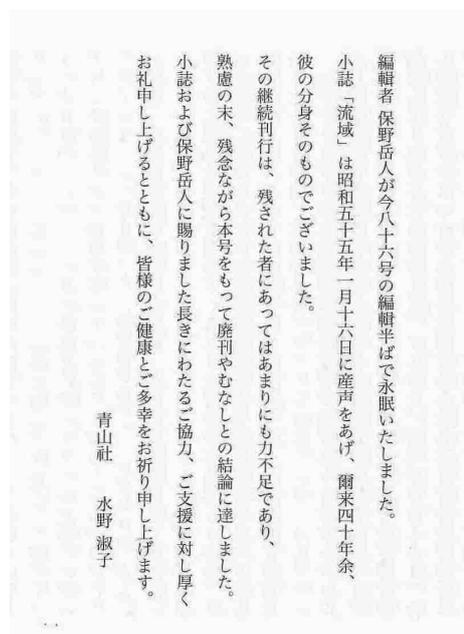
筆者は同社から1冊の翻訳書を出版していただいたほか、『流域』誌上に計12編の駄文を掲載していただいた。心からの謝意を表したい。

●翻訳

ジャック・リバール著『中世の象徴と文学』（青山社、2000年5月）

●『流域』掲載原稿

1. ロランは向こう見ずで、オリヴィエは慎重
—ピエール・ジョナン訳『ロランの歌』（ガリマール、1979年刊）紹介
4号、1981年4月
2. ヴァグネル先生
8号、1982年6月
3. スイス・フランスのメディエヴィスト訪問記
49号、2000年12月
4. 去年の雪 今いずこ
53号、2004年1月
5. 中世文学特集を今
57号、2006年1月
6. ルナールとイヴ
57号、2006年1月
7. 座談会「フランス中世文学と日本」（共著）
57号、2006年1月
8. 象徴史の確立—ミシェル・パストゥロー『ヨーロッパ中世象徴史』（書評）
64号、2009年2月
9. 〔開題〕マリ・ド・フランスは聖トマス・ベケットの妹！
Carla Rossi, *Marie de France et les érudits de Cantorbéry*, Editions Classiques Garnier,
2009
66号、2010年4月
10. 生きものとしての言語活動
68号、2011年4月
11. まぼろしの「あとがき」（松原秀一追悼）
75号、2014年10月
12. 東の鐘と西の鐘—〈処刑〉をめぐって
76号、2015年5月
77号、2015年10月



廃刊のお知らせ
水野 淑子